**待降節第1主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年12月3日**

**「喜び」**

**イザヤ書53章7～8節**

**53:7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。**

**53:8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。**

**使徒言行録8章26節～40節**

**8:26 さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。**

**8:27 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、**

**8:28 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。**

**8:29 すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。**

**8:30 フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。**

**8:31 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。**

**8:32 彼が朗読していた聖書の個所はこれである。「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、／口を開かない。**

**8:33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」**

**8:34 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」**

**8:35 そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。**

**8:36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」**

**8:37 （†底本に節が欠落　異本訳）フィリポが、「真心から信じておられるなら、差し支えありません」と言うと、宦官は、「イエス・キリストは神の子であると信じます」と答えた。**

**8:38 そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。**

**8:39 彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。**

**8:40 フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。**

**今日から待降節、アドベントに入りました。御子イエス・キリストの御降誕を待ち望み備えをしていく時です。今日、教会に来られてクリスマスツリーやリース、アドベントクランツなどいつもとは違う華やかな飾りつけが色々とされていることに気づかれたと思います。先週の木曜日の聖書研究祈祷会の後に有志の方たちで「いよいよクリスマスだね」とか「1年って早いね」とかお話ししながら楽しみながら飾りつけをしました。教会が一年で一番華やかになる時期がやってきました。**

**それはそこには大きな喜びがあるからです。救い主イエス・キリストがお生まれになられた喜びです。イエス様が幼子の姿で私たちの住むこの世界に生まれて来て下さった。全き人として私たちが味わう苦しみも悲しみも喜びも楽しみも全て経験して下さいました。そして罪なきお方であるイエス様が私たちの罪を全て背負ってくださいました。そのお姿は今日の旧約聖書イザヤ書53章のいわゆる「苦難の僕」と呼ばれているこのイエス様を現す預言の言葉のとおりに、「屠り場に引かれる子羊のように」「毛を切る者の前に物を言わない羊のように」静かに十字架の死へと歩まれました。そのイエス様の十字架の死と復活によって私たちは罪赦されて生かされている、愛されている、そして今このようにしてある喜びを持つことができるのです。**

**本日私たちに与えられました新約聖書の箇所の使徒言行録には、今まさにその喜びにあふれた人が出てきます。イエス様を救い主として信じて洗礼を受け、救われた喜びにあふれた一人の人物が出てくるのです。そしてその姿は私たちに改めて「喜び」とは何かを示してくれるのです。私たちが日々感じることができる「喜び」とは何かということが今日の御言葉を通して示されるのです。共に御言葉に聞いていきたいと思います。**

**26節にはこのように書かれています。「さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。」**

**サマリアで多くの人に洗礼を授け救いへと導いたフィリポは主の天使によってエルサレムからガザに下る道に行けと言われました。しかもそこは「寂しい道」であるというのです。エルサレムからガザに下る道、今まさに連日報道されている場所ですが、その途中の道は寂しい場所なのです。この「寂しい道」という言葉は「荒れ野」とも訳される言葉ですが、「寂しい道」「荒れ野」それは誰も通らないような道に行くように命じられたのです。**

**「寂しい道」「荒れ野」それはここにこれからやってくるエチオピアの宦官の気持ちを現したかのような表現です。寂しい心、荒れた心、何か満たされないものがある空しい心。はるかエチオピアからエルサレムへの巡礼の旅です。距離にして1500キロの道のりとも言われています。彼の目的は礼拝です。父なる神様を礼拝するためにはるばるエチオピアから従者を連れてやって来て、エルサレム神殿での礼拝を終えて帰るところなのです。本来であればそれだけの長い距離と時間をかけての礼拝に行ったわけですから、喜びに満たされて笑顔で帰りの道についているはずです。しかし、宦官の様子を見る限り「寂しい道」「荒れ野」この言葉がぴったりのような寂しさが見受けられるのです。**

**それは宦官という特殊な立場がそうさせるのではないかと思います。宦官は簡単に言えば女王に仕える男性としての機能を失わせられた官僚です。しかも彼はエチオピア人という異邦人です。異邦人でしかも宦官である彼はその立場ゆえにエルサレム神殿での礼拝を制限されていました。すなわちどんなに熱心に神様を求めてもユダヤ教徒になることは律法で固く禁じられているのです。ですから、はるばるエチオピアからやって来て神様を礼拝したのですが、彼が願い求めていたような礼拝ができなかったのではないかと思います。だからこそ、礼拝の帰りであるにも関わらず、何か満たされない思いの中で寂しい道を通っていたのではないかと思います。**

**フィリポはイザヤ書を朗読する彼に声を掛けました。読んでいるのは苦難の僕の53章です。宦官は誰のことを言っているのかわからない。フィリポはこの苦難の僕の姿はイエス様のことを言っていること。そしてイエス様は十字架で死を遂げ復活された救い主であることを語りました。すると宦官は自ら洗礼を申し出てフィリポから洗礼を受けました。主の霊によってフィリポは連れ去られて、フィリポと出会う前と同じ状況、つまり馬車の中に一人となりましたが、39節にありますように「喜びにあふれて旅を続けたのです」。それまでと同じ礼拝の帰り道ですが、今の宦官にはそれまでのもやもやした満たされない思いはありません。洗礼を受けてイエスはキリストですと信仰の告白をしました。そうすると、いまや宦官は喜びにあふれて旅を続けるのです。**

**エチオピアの宦官の「喜び」とはどのような喜びでしょうか。**

**39節の「喜びにあふれて旅を続けた」と訳されている文章は、元の言葉を直訳すると「そこで喜んで彼の道を彼は行った」なのです。喜んで彼の道を彼は行く、ということは彼の道はエチオピアに到着して終わりではありません。これからの彼の道、それは彼の人生と言い換えても良いでしょう。その彼の人生を彼は大きな喜びを持って歩んでいくのです。もちろん信じていても困難も苦しみもある、それでも彼が喜んで人生を歩んでいく、それほどまでの喜びを持って歩んでいける喜びとはどのような喜びなのでしょうか。**

**アドベントに入りました。このアドベントの時によく読まれる聖書の箇所の一つにマリアへの受胎告知の場面があります。ルカによる福音書1:26以下に記されています。その28節で天使ガブリエルがマリアにこのように言っています。「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる。」実はこの「おめでとう」と訳されている言葉は聖書のもとの言葉では「喜びなさい」なのです。先ほどのエチオピアの宦官の「喜んで」と同じ単語です。ですから、天使ガブリエルの言葉は「喜びなさい！恵まれた方」なのです。マリアにとっては素直に喜べない状況なのですが、天使は「喜びなさい！恵まれた方」というのです。その理由は「主があなたと共におられる」からなのです。マリアは一人ではない主があなたとともにいてくださる。これから神の御子の母として歩まなければならない大変なことがあっても、どんな困難があろうとも主があなたとともにいてくださる。それが喜びの理由です。主がともにいてくださる。**

**エチオピアの宦官の喜びも「主が共にいてくださる」この喜びです。イエス様の十字架の死と復活によって救われて生かされている、こんな罪深い私のためにイエス様が死んで下り愛して下さった、その喜びと共に、自分を救いへと導いてくれたフィリポの姿が見えなくなっても、今は一人のように見えても決して一人ではない。主が共にいてくださる。今も、帰り道も、エチオピアに帰ってからも。彼の道を彼の人生を彼は喜びを持って歩んでいくのです。宦官はもう一人ではありません。決して孤独ではありません。主が共にいてくださるのです。これからどんな困難があろうとも、苦しいこと哀しいこと悩むことがあっても、主が共に歩んで下さる、その喜びがあるからこそ彼はこれからも主と共に信仰の旅路を歩んでいく、喜びに満ちた信仰の旅路を歩んでいけるのです。**

**作家の三浦綾子さんが次のような祈りの言葉を残されています。少し長いですが紹介します。**

**「神よ　人生は　一人　林を　歩み行くような　ものかも　知れません  
自分の前には　何の道もなく　また　自分の後を　従いてくる者も　ありません  
そんな辛いものかも　知れません。  
  
でも、どんな辛い道でも　主が手を引いて下さるなら　私たちは　安んじて  
生きて行けるのでは　ないでしょうか  
  
何十年かの　人生の中で　人は幾度　大きな　重荷を肩に負い　おろし　また負って　　来たことでしょうか  
  
でも　主が共に在(ましま)すならば　ああ　本当に共に在（ましま）すならば　それは**

**何と幸いな人生であることでしょう」**

**主が本当にましますならば、主が共にいてくださるならば、主が共に歩んで下さるのなら、私たちの人生がたとえ困難だらけの人生であっても、大きな喜びを持って歩んでいけるのです。私たちは決して一人で人生を歩むのではありません。主が私たちの手を引いて下さり、私たちと共にこの人生を歩んで下さるのです。今までも、今も、そしてこれからも。私たちはなんと幸いな人生を歩んでいるのでしょうか。**